

## ■ FOMC 通過でドル買い材料は一旦出尽くし！？

前回更新分の本欄において、ユーロ/ドルについて「個人的には戻り売りを仕掛ける算段で臨みたい」と述べた。実際、あれから一週間が経過するなかで 7 日につけた戻り高値＝1.1840 ドルを上回することは一度もなく、基本的に上値は 1.1800 ドル処でガッチリ押さえられる格好となっている。

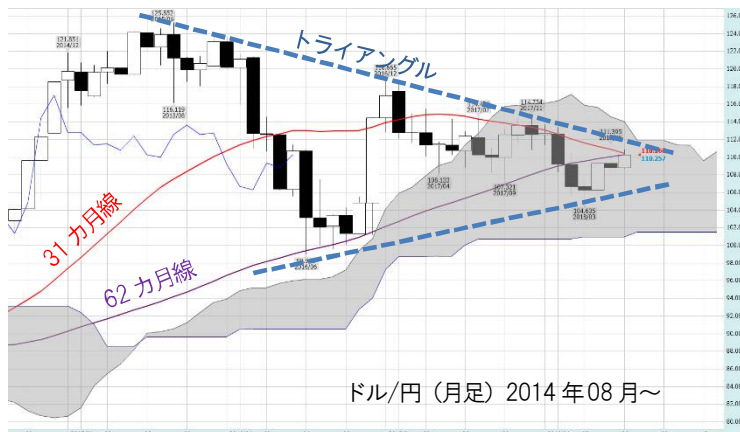
周知のとおり、本日（6/14）行われる ECB 理事会において量的緩和策の出口戦略について討議される可能性があることから、今のところは 21 日線をサポート役として底堅く推移しているが、やはり現実的に「今年 9 月以降の政策をどうして行くか」についての具体策が今回示唆されることはないだろう。そのことを、果たして市場が「失望」と捉えるのかどうかが目先最大の焦点であり、それは予断を持たずにしっかり見定めるしかない。

ただ、忘れてならないと思うのは、4 月半ば以降急激に進んだユーロ安によって域内で生活する人々の暮らしにその影響（主にエネルギー価格を中心とした全般的な物価の上昇）が及んでいることと、ユーロ圏の域内景気が年初から減速続きであることについて、それを一過性のものと判断することはできないということ。加えて、目下の欧州で台頭するポピュリズムの流れへの警戒が容易に解けるものではないということと、当面は米・欧間の通商摩擦問題が大いに危惧されるということも再認識しておく必要がある。

現在、ユーロ/ドルの 21 日線は 1.1725 ドル処、一目均衡表の週足「雲」上限は 1.1695 ドル処に位置しており、これらが当座の下値サポートとして意識されやすくなっていることは間違いない。それだけに、ECB を通過した後、これらの節目を下抜けるような展開になりやしないかきっちり見定めておくことも重要と思われる。

なお、昨日終了した米国の FOMC は結局、最終的にユーロ/ドルを再び 1.1800 ドル処にまで押し上げる一因となった。既知のとおり、FOMC 参加メンバーらの金利見通しからは年内あと 2 回（年間 4 回）の利上げを実施する可能性が示され、一旦は強くドルが買われたものの長くは続かず、結局は“往って来い”の展開となった。

「とりあえず、目先のドル買い材料は出尽くし」と言ってしまうまでもなのだが、いかにも迫力不足の感は否めない。ことに、ドル/円の上値が酷く重いということについては、何とも筆舌に尽くしがたいものがある。当然、そこには「トランプ（米大統領）の影」というものがあり、広くトランプ・リスクなるものの存在があるからに違いない。なにしろ、米国は今年のなかで計 4 回も政策金利を引き上げる可能性があるというのである。それにしても、足下のドル/円＝110 円台前半というのは、かなり残念な結果であると言わざるを得ない。



実際、（前回も触れたが）月足チャートを眺めてみれば、ドル/円はトランプ大統領就任の 2017 年 2 月以来ずっと月足・終値で 31 カ月線を上抜けていない（左図参照）。ただ、それだけに 6 月のドル/円の月足については些か興味深いところがあるというのも事実ではある。なお、現在ドル/円の 31 カ月線は 110.44 円、62 カ月線は 110.24 円に似位置している。こ

これらの水準を月末時点で上抜ければ、そこからは少し変わった景色が見えてくるようになるかもしれない。仮に両線を上抜けてきた場合は、（少し気が早いが）次にトライアングルの上辺を上抜けるかどうかも大いに注目されるところとなろう。

（06 月 14 日 11：20）